



認知症に起因する徘徊と 安心なまちづくりを考える地域円卓会議

認知症でも安心して暮らせるまち首里石嶺の実現に向けて
民間の力を活用したまちづくりを問う

実施報告書

- 日 時： 2016年12月16日（金）18:00-20:30
場 所： 沖縄県総合福祉センター 403 研修室
主 催： 公益財団法人みらいファンド沖縄
協 賛： 宗教法人真如苑、一般社団法人 全国コミュニティ財団協会 CI モデル事業
協 力： 那覇市石嶺小学校区まちづくり協議会、NPO 法人まちなか研究所わくわく

報告書作成
NPO 法人まちなか研究所わくわく

ACTIVITY REPORT

【報告】 認知症に起因する徘徊と安心なまちづくりを考える地域円卓会議



- 日 時：2016年12月16日（金）18:00-20:30
- 場 所：沖縄県総合福祉センター 403 研修室
- 着席者数：8名（論点提供者、司会、記録者含む）
- 来場者数：76名（福祉、医療関係・企業・行政・市民）
- 主 催：公益財団法人みらいファンド沖縄

- 協 賛：宗教法人真如苑、一般社団法人
全国コミュニティ財団協会 CIモデル事業
- 協 力：那覇市石嶺小学校区まちづくり協議会
NPO法人まちなか研究所わくわく
- お問合せ：NPO法人まちなか研究所わくわく

論点提供 比嘉 満 氏（那覇市地域包括支援センター石嶺 所長）

認知症でも安心して暮らせるまち首里石嶺の実現に向けて 民間の力を活用したまちづくりを問う

今や県内における認知症を患う方々は県民の28人に一人とされています。認知症に起因する徘徊に対して、地域はどのように対応し、安心できるまちづくりを実現すべきなのでしょう。今回は、首里石嶺地域で実証実験される、自動販売機を活用した徘徊対策事業を通して、認知症を取り巻く地域の現状を理解し、課題解決に向かう地域のアクションを考える円卓会議を行います。

センターメンバー



比嘉 満
那覇市地域包括
支援センター
石嶺 所長



涌波 淳子
特定医療法人
アガペ会
理事長



高野 大秋
社会福祉法人
那覇市社会福祉
協議会
地域福祉課課長



小波津 勇
沖縄県警察本部
生活安全企画課
企画指導係



森 慈
トキニライド社
代表社員



猿渡 進平
医療法人静光園
白川病院
医療連携室長

➤ 円卓会議に参加いただいた皆さんから

事実の提供

- 地域包括支援センターは、地域の 65 歳以上の方の何でも相談窓口。直接相談に来る、訪問に行く、民生委員や自治会の方から紹介してもらう場合がある。介護保険・住宅の問題・介護予防の相談を主に受ける
- 認知症高齢者の日常生活自立度の判断基準
 - I：軽く物忘れはあるが、一人で生活できる
 - II：誰かがちょっと見てあげないと、支障がでる
 - III：日常生活をずっと誰かが見ていないといけない
 - IV：24 時間見続ける必要がある。外に出ると戻れない
- 自立度 II a は家庭の外に出た時に危ない。自立度 II b は家の中、外でも見てあげないと、物の置き忘れがあったりする。自立度 III a は日中のみに、自立度 III b は夜間まで寝ないで、歩きまわってしまう
- 認知症の診断は、その人の行動を診て判断するので、医者だけが判断するのではない
- 老人施設やグループホームは入所型で、24 時間のケアが付いている施設。小規模多機能施設は、通所を中心として、時々宿泊できる、また、ヘルパーさんが訪問する。通所介護は日中だけ看るもの。居宅介護支援は、ケアプランを立て、施設の紹介等をする
- 石嶺は人口 22,000 人、高齢者 4,800 人、高齢化率 22.1%（那覇市全体の高齢化率よりも高い）、面積 2km²、高台（海拔 200m）、福祉施設が多い（沖縄県総合福祉センター、オリブ山、偕生会、児童園等）
- 要介護認定者における認知症自立度の分類

	石嶺町	那覇市
人口	2.2 万人	32 万人
要介護認定者	1,181 人	13,165 人
自立度 I	—	3,250 人(37 人に 1 人)
自立度 II 以上	796 人	8,750 人(27 人に 1 人)
自立度 III 以上	427 人	—
- 那覇市で自立度 II 以上の方は、65 歳以上で同級生の 5 人に 1 人、80 歳以上で 3 人に 1 人、認知症は身近な存在
- 30 年以上前、認知症の方は精神科の病院に入っていた
- 認知症サポート医は、認知症専門医から、または、一般の医療を行う先生からなる 2 タイプがある。その 2 タイプが協力して、認知症の相談医をする
- 沖縄県内には 46 名の認知症サポート医がいる
- 認知症の症状は、性格によって家の中が良い人や出歩きたい人がいて、以前の生活によって、行く場所が変わる
- 沖縄県の取り組みで、高齢者の見守り協定があり、各市町村の見守りネットワークを作っていて、沖縄県警も入り、徘徊する恐れがある方を事前登録して、情報共有を行っている
- 北中城若松病院の病床数は全部で 223 床、医療が終わってもお家に帰れない方の為の老健施設 100 床。在宅を支える様々な事業所、通所系と訪問系のサービスがある。現在、認知症、高齢者、医療がメインテーマである
- 沖縄県が認知症の病院として指定する認知症疾患医療センターは、県内には 6 センターある。琉大付属病院、北部（宮里病院）、中部（北中城若松病院）、南部（嬉野が丘サマリヤ人病院、オリブ山病院）、宮古島（うむやすみやあす・ん診療所）
- 那覇市社会福祉協議会（那覇市社協）では地域の顔の見える範囲で支援が必要な方を早期に発見する仕組みづくりをしており、那覇市の 157 自治会に見守り隊が結成されている。
- 那覇市の自治会加入率は 18% 程度。徘徊をした人が亡くなったことをきっかけに、与儀市場通りで見守り隊がスタートした（H26）
- 那覇市社協は民生委員と繋がりが深く、16 ブロックの民生委員組織の定例会に参加している。しかし、見守れていないケースもあるので、近所・顔見知りになれる自治会エリアの中で見守るための、見守り隊ができた
- 気になる人を見つけても、どこに繋いだらよいかかわからないので、見守り隊で繋げ先を紹介する。（民生委員、地域包括支援センター、自治会、社協コーディネーター、新聞販売店、等）
- 認知症が原因の行方不明件数（書面での警察届出数）

	沖縄県	全国
平成 24 年	63 件	9,607 件
平成 25 年	94 件	10,322 件
平成 26 年	68 件	10,700 件
平成 27 年	102 件	12,000 件
- 上記の平成 27 年、102 件の内訳
 - ・警察による発見、他の方の通報 51 件
 - ・家族による発見、本人帰宅 37 件
 - ・その他 10 件 ・死亡 4 件
- 90% 以上は 2 日以内、ほとんどは当日に発見されている
- 家族の了解を確認できれば、公表して探すことができる
- 届け出書類の手続きと検索は同時平行でうごく。
- 国（厚労省）として進めているキャラバンメイトでは、講師の育成をしている。県全体で 58,000 人が、一回は認知症の講義（90 分）を聞いた形になっている
- 警察の方が協力をお願いできるネットワークは、公民館、タクシー（無線）、バス、ラジオ
- 声掛けをしたいが、外見だけでは認知症か判断できない

事例の提供

- 91歳の男性、介護度：介護1、認知度：Ⅲa、自宅にお住まい、デイサービスを受けている。何度も行方不明になり、3時間後に新都心で保護、48時間以上警察が捜索して首里赤平町で保護、1時間後に経塚で保護される
- 74歳女性（ご主人と同居）、お茶を買いに公設市場へ行き、タクシーで帰宅。しかし、運転手に住所を言えず
- 86歳女性、朝の5時にいないことに家族が気づいた。事業所間で情報共有をしていて、14:10頃に浦添市浦西で、たまたま別の事業所の方が発見して保護
- 76歳女性、病院受診中に抜け出しバスに乗って終点まで行った。バスの事業所の方が連絡してくれた
- 北中城若松病院では、在宅に帰るために、その周辺の方たちに、簡単な認知症サポート講座のような勉強会をする仕組みを作っている
- 大牟田市の事例
 - ✓ 高齢化率が34.4%で毎年1%ずつ上がっている。人口12万人だが、毎年1000人減る。高齢者の23%が独居
 - ✓ 住民のニーズもあり、行政中心に政策を進めている
 - ✓ 地域の医療、介護施設が事務局となり実行委員会が作られ、第1回認知症SOSネットワーク模擬訓練in白河が行われた。参加者9名で、挫折からのスタートだった。しかし、平成26年には参加者232名になった
 - ✓ 中、高校生にも参加してもらい、多くの方が徘徊役を体験する模擬訓練を行っている
 - ✓ 警察の生活安全課の方が模擬訓練へ積極的に参加してくれている
 - ✓ 住民の歩いて行ける範囲になるように、空き家を活用したサロンを作り、住民同士が認知症になる前から繋がれるようにした
 - ✓ 退院後、自宅に帰れる患者の割合が、H18年の16.9%から、H22年の36.8%と増えてきている

視点の提供

- 「認知症」は皆に関わる課題
- 自販機が貢献できる要素は、全国どこにでもあること、電源があること、お金を生み出すことである
- 自動販売機に受信機を取り付け、ビーコン（発信機）を持つことで、安心して徘徊できるまちにしたい
- 警察に通報があるのは危険な場合なので、できるだけ早く発見したい
- 地域にはいろんな困りごとがあるので、認知症の問題に取り組む人も、様々な問題に取り組むようにする
- 地域づくりに関心をもつ人生のポイントは2つある。子育ての時期、親の介護が必要になる時期。社会との接点を持つ必要性が出てくるタイミングを狙って、長い目で、住民と地域活動をマッチングすることが大切
- 那覇市社協では、タイムス、新報に見守りの協力をお願いしているが、さらに、地域をコマメに回っている方々と、一定の約束の元に、発見したことを共有することで、きめ細かい発見に繋がると感じている
- 市町村と警察はデータベースを共有しているが、民間とも繋がると良い
- アガペ会、地域包括支援センターではサポーター養成講座を行っているが、その後、地域の方同士で議論する場、体験する場に繋がりたい
- 人と人との繋がりがあり、その上に認知症の方を見守る仕組みがあることで、安心できる地域になる
- 知る事（疾患、環境、その人の状況、限界）、行動する事、繋がる事が大切

➤ 今後のアプローチの方向性（提案）

- 認知症は地域住民にとって身近な課題、それを知り、議論し、体験する機会作りが必要
- 自己責任ではない、地域民間力を活用した「まちで見守る」仕組みは、地域作りの基礎
- 「徘徊問題」は広域化する傾向にあり、隣町との見守り体制とのネットワーク化は急務

■参加者によるサブセッション

「認知症でも安心して暮らせるまちになる為に、民間で出来ること」(原文のまま)

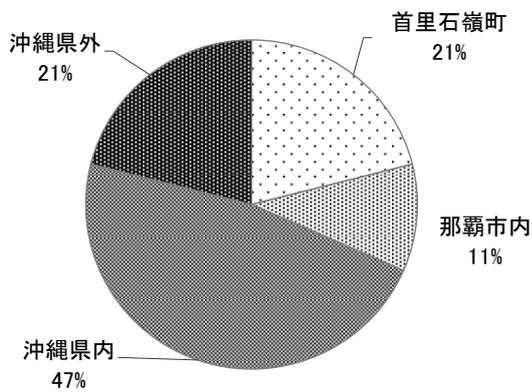
- ① オジイ・オバアと子供が繋がる場←企業が提供
- ② 地域の人づくりと IOT による整備を並行して行なうのが良いのでは
- ③ 楽しい事を探して人集めをする。
- ④ 今ある企業がつながる (ヤクルト、新聞配達店、スーパーレジ係)
- ⑤ ・営業職による見守り
・まちづくり協議会で芝居→自治会への加入促進
- ⑥ ー民間のちからー
*ヤクルトレディ・・・障害者の方が声かけしたのがきっかけ。唯一受け入れた。
*郵便配達員・・・住民の情報知ってる
*移動販売・・・山間部
- ⑦ ゆんたく!! (大牟田だって 9 人から始まった) 後は楽しい仕掛け。
- ⑧ 地域の企業や団体が雇用等を行い、地域包括ケアセンターがサポートや責任を持つことで、認知症の方々の日常のサポートとなる。
- ⑨ 子供の時から、認知症を学ぶ
- ⑩ 拠点づくり
- ⑪ 1. 声かけの訓練
2. 拾いあげた情報の受け皿 (1、2 は並列)
子供の力←地域の結びつきのきっかけ
・一度訓練すると次のハードル下がる
・フォーマル、インフォーマルな方法の両方で
- ⑫ 徘徊して、第一発見者 (住民) 「見ない顔の方がいる」。センサーは嫌がる拒否的な考えある他に→スマホ、GPS、名前記入。どれだけ地域・民生委員と繋がっているか。他
(外) の地域に出向く。地域ケア会議・講師
- ⑬ 定期訪問サービスと連携 (ダスキン、水、)
- ⑭ ヤクルトのルート販売で早期発見。郵便配達員がチャイムを押して本人確認。ゴミ収集業者がゴミを出しているか。本人が元気であれば旗を出す。ゴミ出し曜日が分からなくなったら、近隣住民が声かけ。日頃からの隣近所の仕合いが大切、近隣者による見守り。電気ポットを使わないと通知。電気・ガス会社、検針時に確認。食堂、コンビニ、商店に買い物へ来るか、寄らなくなった時に連絡もらう。包括支援センターの認知度が高まれば、まずは包括へ連絡が入れば良い。
- ⑮ 施設からエスケープ。休みの職員も含めて皆で探した、タクシー会社に依頼した、自治会等との普段からの関わり。
- ⑯ まちづくり協議会市内 4ヶ所、部会、高齢化している。若い世代は見守る：徘徊、買い物。Ⅲ：通所の準備→行方不明。隣の声かけ、老人会長。かねひで、郵便局→来たら Tel. 買い物したらサポート。個人情報、カベ←恥ずかしい。民生委員はキーマン。認サポ講座→子供たちへ→発見につながる。
- ⑰ 病院、薬剤師、顔の見える関係。自治会機能の強化。まちづくりの一環としての取組。まちになると他人化、声がかかりにくい。地域を巻き込んだ、公民館活動。昔からの人と新しく入ってきた人の結びつきが弱い。認知症かどうか判断ができない、元気に歩いていたらわからない。地域で要介護がわかると良い。認知症というもの自体が分からない、まずは知ることが大切。

認知症に起因する徘徊と安心なまちづくりを考える地域円卓会議 参加者アンケート集計

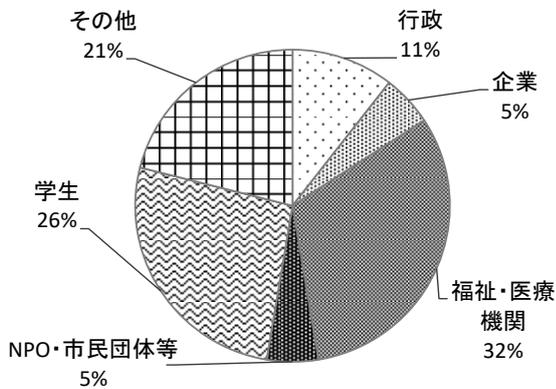
◆概要

- ・日 時：2016年12月16日（金）18:00-20:30
- ・場 所：沖縄県総合福祉センター 403 研修室
- ・着席者：8名（司会、記録含む）
- ・参加者：76名（アンケート回収19名、回収率25%）

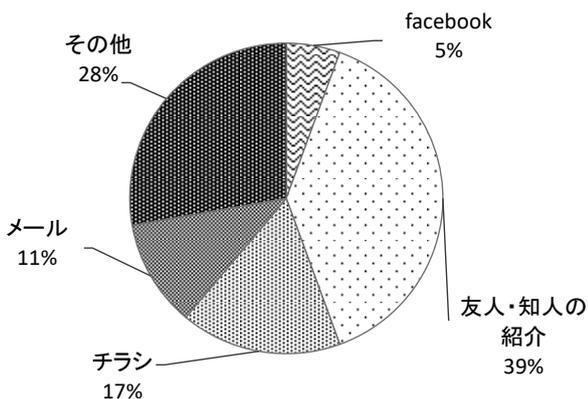
1. どちらから？



2. 所属



3. 円卓会議はどのように知ったか



4. 満足度

平均：4.5（5点中）

5. 満足	4. 概ね満足	3. ふつう	2. あまり満足していない	1. 不満足	未記入
12名	6名	0名	1名	0名	0名

5. 満足度の理由

(5. 満足)

- ・ 専門家と一般の方が意見交換をできる
- ・ とても勉強になりました。地域にでむいていきたいと思いました。
- ・ まとめと司会で振り返りできた。
- ・ 認知症への理解が深まったのみならず、県内、県外の事例を知ることができてよい経験になった。
- ・ 幅広い着席者のジャンルで、初めて知ることが多かったです。様々な立場で、「共有する」ことを目的とされている姿勢が一環していると感じました。
- ・ 色々なお話を伺え、事例もきいた
- ・ 認知症に関してもっと勉強する必要を感じました。まちづくりで守られる方もいるのだと気づかされました
- ・ 円卓会議をどの様な形で行っているのか、実際に見たかったので
- ・ 学生以外の意見もあり、自動販売機のするなど、さまざまなアイデアが面白いと思い、これからのアイデアをこれから活用できるよう、これからは活かしていきたいと考えます。
- ・ 多角的な視点から、課題を掘り下げられた。会場のレイアウトも、不思議な一体感があり、すごく、主体的に考えられた。参加者同志でも話のできたのもすごく良かった。
- ・ 地域づくりに関わっていることから、様々な立場の人の様々な意見が聴けて良かったです。少人数でのグループワークも皆積極的に

意見されたので楽しかったです。

- ・ とても良かった。今後も続けて欲しいです。

(4. 概ね満足)

- ・ いろいろな専門家から様々なことを聞くことができることです。
- ・ 多くの事例や意見を聞いて、とても参考になりました。
- ・ 課題を上手く整理できていた。
- ・ 認知症というものを初めて学びました。高齢化の社会では必ず考えるべきことだともおもいました。
- ・ 大牟田市の猿渡さんのお話が分かりやすかった。参加者 9 名からスタートしたのが、現在は 200 名の人々が関わっている事、特に本人が地域の中、住みなれた自宅で活動出来るような、システムが出来る地域がある事等 (退院支援)
- ・ 地域活動の参考になりました。

(2. あまり満足していない)

- ・ 自己紹介の時間が長い。着席者の取り組み状況を 1 時間半程度で済ませ、残りの時間を参加者からの意見を取り上げ、地域のまとめをした方が良かったと思う。

6. 印象に残ったこと

- ・ 自販機の業者の方が、社会資源として、社会貢献として「ハイカイの方」を除かず、為に役立てたいという気持は印象に残った。
- ・ 専門職だけでなく、タクシー会社等の企業も含めたネットワークが作れたら良いのでは？
- ・ 自動販売機による支援。一般人が認知症に対する理解が不足なので、不関心や錯誤をもた

らすと思うから、認知症の人も安心して外出できる街をつくるためには、認知症に対する理解を深めることが大切ではないかと思う。

- ・ 自販機の例はとても良いと思った。地域全体で支える、やっていくことの重要性。
- ・ 銀行など、地域まわりをしている人や企業をまきこむアイディアは可能性があると思いました。まちづくりに関する人の時期、ポイントという話は、参考になりました。
- ・ 自分は (北海道出身、大学の為、来沖) 認知症についての学びを小、中、高ではやっていなかったですが、石嶺の小学校ではホームの人が講演を行っており、知識はあるらしいので、もう一歩！をできたら良いなと思いました。若狭で子どもと家族向けに、リッカ！ヤールキャラバン！をやっているのですが、そこに高齢者を繋げられたらなと思います。
- ・ 自動販売機が受信器となって認知症になっても安心して出歩ける地域、まちを目指す。琉銀の職員さんが、発見された認知症の方の一時保護。「いつかは皆、年を取る」という皆が共通の課題を持っていることに、ターゲットにした、全世代への問題提起
- ・ 退院：在宅への復帰に地域の人々のかかわりを求めた視点、良いアイディアと思いました。
- ・ ビーコンを使った自販機の仕組みは目からウロコでした。板書をどンドン貼り出すスタイルは良いですね。ちゃんとしたカメラを持ってくれば良かったです。
- ・ 司会者の言葉のかけ方、記録のとり方
- ・ 進行がパネリストの話の分かりやすくかみくだいていて、理解が深まった。ふり返り、グラフィクも良かった。

(写真) 会場の様子



認知症に起因する徘徊と安心なまちづくりを考える

地域円卓会議

地域の困り事を社会課題として共有する場
認知症でも安心して暮らせるまち
自理石炭の実現に向けて民間の力を活用しようとする

比嘉満以 (那覇市地域包括支援センター事務)

65以上の何れも相談窓口
介護・住宅・予防...
訪問 民生委員 自治会

石炭 25,200人 (人口)
4,800人 (高齢者)
22.7% (高齢化率)
2km 高台

福祉施設 99ヶ所
県庁 総合センター
山 公園
山 公園
山 公園

IIa以上が認知症と診断される

I 一人て生活できる 在宅
II 誰かみてあげない
III ずっと誰かみてない
IV 24時間監視が必要

家の内外 昼間 夜間 入所 通い

3ヶ所 新居中心 保証
98人 警察行政 生活支援
74人 介護サービス 介護市場
176人 病院受診 中心に150人出
150人 介護市場

86人 介護
14人 介護
今年入札からの集約

石炭町 認定 1181名 (介護認定)
IIa 796名
IIIa 427名

浦波淳子さん

30年前 精神科に入所
北中成村 若松病院
223床 病院
老健 100床
在宅も支えるサービス

認知症高齢者医療センター

認知症リハビリ 46名
認知症しほ医療センター

専門医 6名
認知症診断医 6名

那覇市 32万人
要介護 15,341人
血 1151人
I 3250人
II 8750人

同性 5人 7人 (65)
3人 7人 (60)

身体存在
おうちで出歩く人
家の中が2人
もとの生活

ADL 正の能力
食事 自分で生活できる
身体もめ あります
徘徊も

高野大秋さん

地域の中で早期に発見する (おまわり) 顔の見える

自治会 加入 18%
見守り隊 (H26)
社協
16の民生委員のグループ
おまわりできないところもある
近所 顔見知りの中で見守る

民生委員 自治会 包括 社協 新聞 郵便

小波津勇さん

大きく活動がメイン
行先不明: H24 認知症 63件
書類提出 94件 (H25) 10,322
68件 (H26) 10,700
102件 (H27) 12,000

H27
発見・通報 51件
家族発見 12,000
その他 10件
死亡 4件

90%以上は2日以内
おまわり 認知症 顔の見える
おまわり 認知症 顔の見える
おまわり 認知症 顔の見える

森慈さん

自動販売機の営業
置く目的 利便性
増えたが 土地活用のビジネス
自動販売機の価値を高めていく
社会貢献

「認知症」は皆にかかわる課題
全国どこでも
電源 あり
お金 あり

安心して徘徊できるまちづくり

小波津進平さん (印刷版)

大牟田市 23% 独居
34.4% (高齢化率)
12万人 毎年 1000人 へる
H16 訓練 (おまわり)
家族の会 H13 へ

退院支援
本人が 家族 サービス 地域 地域
本人が 家族 サービス 地域 地域
本人が 家族 サービス 地域 地域

認知症の理解
認知症 徘徊 徘徊
認知症 徘徊 徘徊

おまわり 認知症 SOS ネットワーク
模擬訓練 in しがわ

参加者 9名
任意団体 (5ヶ所の会 病院が 車いす)
空家の活用
H NPO法人 (しがわの会)
参加者 200名

中学生 高校生 の参加 徘徊役も 増える

地域に 認知症を 国に 認知症を
地域に 認知症を 国に 認知症を
地域に 認知症を 国に 認知症を

タイムス 新報
見守り 協力 (社協)

正に 銀行も 取りで

サポーター 養成講座 (包括支援センター)

行動 知識 体験 議論

地域の 中心を 持つ 2つの 材料
子育て 親の 介護
社会と 課題を もつ 必要性

民間の つながり 情報共有

沖縄県警 見守り 協定 事前登録 スタート

警察 (大牟田市) 生かす 課 認知症 研修 積極的 参加

講師の 育成 58000人 参加 した
サポーター 養成 講座

タイムス 新報 ねらって

